



# 田んぼ2030プロジェクト 田んぼだより

第8号 2024年12月27日発行

田んぼの生物・文化多様性2030(略称:田んぼ2030)ニュースレター  
発行:NPO法人ラムサールネットワーク日本(ラムネット)水田部会  
所在地:〒110-0016東京都台東区台東1-12-11青木ビル3F  
TEL/FAX:03-3834-6566 電子メール:info@ramnet-j.org  
ホームページ:http://www.ramnet-j.org



## 目次

- CBD/COP16 Private Excursion  
「エスメラルダ工場と契約圃場の見学」 後藤 尚味 (ラムネット) 事務局長 ..... 1~2
- 田んぼの生物多様性は守ることができるのか？  
～ 田んぼ2030プロジェクト実績報告会 ～ 安藤 よしの (ラムネット) 理事) ..... 2~3
- MS&ADグリーンアースプロジェクト  
「竹林の整備 - 印旛沼流域における台地と谷津での取組」に参加して 金井 裕 (ラムネット) 共同代表) ..... 3~4
- 水田部会からのお知らせ／編集後記 ..... 4



## CBD/COP16 Private Excursion 「エスメラルダ工場と契約圃場の見学」 事務局長 後藤 尚味

CBD/COP16の折り返し日となる週末の10月26日土曜日に、COP開催都市であるカリから約25km南下したハムディという町にある精米工場および契約農家の圃場を見に行きました。1950年創業のエスメラルダ社はコロンビアで一番古い精米会社で「ブランキータ」というブランド名で親しまれています。社会的責任、持続可能性、倫理を徹底追及し、多くの環境賞や認証を受けており、2009年からは「鳥に優しい米」に取り組んでいます。

### 1. 工場見学

ホセ・ドミンゲス社長自ら出迎えてくれました。創始者は自分の叔父で、二代目であること、叔父さんの奥様の名前エスメラルダが社名の由来であること等を説明してくださいました。



程なくして、工場長が施設の案内をしてくださいました。農場から搬入した米は、藁等混入物を取り除き、米粒の中身が空のもの・欠損したものを除くため、二段の振動台と風選別機にかけます。その粃の状態、受け入れロット毎に水分計測機にかけて調査します。水分量が20%~23%くらいが理想だそうです。粃摺りは、回転する二つの筒の間をすり抜ける際に殻が取れる仕組み。とれた粃殻は炭化させて圃場に戻すことにより、栄養が循環し、肥料の購入も抑えることができます。炭化には、乾燥用ピットに熱風を吹き込むための装置の熱源を利用して無駄が

ありません。玄米はミルで白米と糠に分け、糠は動物の餌として売られます。その後、振動と風選別で割れてしまわず米を選び分けた後、光センサーで色のついた米を弾き飛ばし、残ったきれいな白い米が、工場内のレールを通じて、別棟に運ばれ梱包工程に入ります。1時間に15トンの梱包能力があり、毎日16時間作動しています。最も流通しているのは10kg袋で、商品はトラックに積まれて、コロンビアの南西部に出荷されます。

**代表的な商品の紹介**  
(米はいずれも長粒米)

プレミアム	オリザ
	
粒が大きくて最高品質	最も長い種 (割れ米なし)

### 2. 農場見学

コロンビア政府は地域共同体で農業を行う組織に土地を与える政策を展開していて、今回訪問した2つの共同体はこれにあたります。コカと比較すると収益自体は十分の一に落ちますが、野菜だともっと割が悪いそうで、多くの共同体では米を育てています。また、自分たちが食す分は取り分けてあり、食うには困らないようになっています。因みに、コロンビア人の米の年間消費量は一人当たり42.7kg、自給率は94%。日本は、一人当たり50.9kgで、米の自給率はほぼ100%。

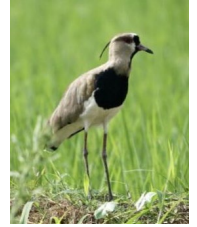
基本は二期作ですが、最近では水不足で少し収穫時期が遅れる傾向にあるそうです。作り方も日本のそれとは異なり、田んぼに水を貯め底の泥と攪拌してから放置します。うっすら水気が残っている状態になったら種粃を撒き発芽させます。見学した圃場は、いずれも取水口はあるが排水の設備は無く、聞くと、自然蒸発に任せているとのことでした。

農業は、1回だけ初期の段階で除草剤を使用しますが、殺虫剤については一切使わないと言い切っていました。降水量は

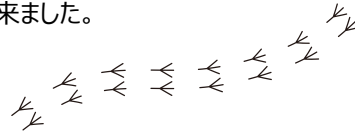


気候変動により減少傾向で、従前の天水だけでは足りず、最近では川からポンプで水をくみ上げています。見学した圃場は、パイプラインか土水路で、仕切りのあぜ（ボルダ）の間を切って隣の田んぼへ、水を流し入れるようになっています。閉じる時は泥で塞ぐ簡単な作りで、かさ上げ・暗渠とは無縁の圃場でした。なお、トラクター等の農機具は、全て有名日本企業製でした。

時間が限られていたため、後ろ髪を引かれる思いで圃場を去りましたが、「鳥に優しい米」ブランドの名の通り、沢山の鳥を見る事が出来ました。



撮影：ハンドンウク



発芽と泥の水路



農家さんご一家と一緒に



共同体のみなさんと一緒に

## 田んぼの生物多様性は守ることができるのか？～ 田んぼ2030プロジェクト実績報告会 ～ 安藤 よしの

田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクト実績報告会が11月23・24日、栃木県上三川町の民間稲作研究所有機農業技術支援センターで開催されました。2021年の田んぼ2030プロジェクトキックオフから3年が経過、この間に自然/社会環境は大きく変化しています。実績報告会はラムネットJ及びプロジェクト参加者の活動を振り返り、これからの活動を議論する目的で開催されました。

### 1. エクスカーション（23日 14：00～16：00）

実績報告会の前日、栃木県生物多様性アドバイザーの川俣将世さん・民間稲作研究所川俣文人さん、館野廣幸さんの3名に民間稲作研究所の圃場及び周辺の里山林再生の現場等を案内していただきました。春から秋にかけて多様な生きもので賑わうのだそうですが、冬季の開催で見られず残念でした。現在のところ圃場は河川と分断されており、豊富な地下水を利用していますが、生きものが行き来できるように河川と繋ぐ方法も検討できるのではないかとのことです。



冬虫夏草：昆虫、クモ類などを宿主として寄生し、その宿主を殺してその体を栄養源として成長する菌類。日本では300種程度。東邦大学 HP より

周辺の里山林は、かつては落ち葉を肥料とするなど活用されてきましたが、人の手が入ることがなくなって荒廃しました。現在、明治里山再生プロジェクトなどが活動しています。観察中、ふわふわの落ち葉の層の中に冬虫夏草が何個も発見されました。

### 2. 実績報告会（24日 10：00～15：00）

#### ①なぜ「田んぼ2030プロジェクト」か？

ラムネットJ 理事 呉地 正行氏

「田んぼ2030プロジェクト」は2010年、名古屋でのCBDCOP10で採択された愛知目標を水田で達成するためにラムネットJが創設した「田んぼ10年プロジェクト」の後継であり、田んぼ10年プロジェクトで達成できなかったことや新たな課題にチャレンジし、田んぼとその周辺地域の生物多様性をプラスに転じることを目指していることなどを説明しました。

#### ②「危機に晒される水田農業と生きものたち」

民間稲作研究所理事長 館野 廣幸氏

水田稲作は最も持続可能な農業であり、生きものや人間の暮らしを支える多様な恵みをもたらしてきましたが、米の生産の場所としてしか意識されない時代となり、河川の改変等で水の循環が分断され、生きものの生息域が脅かされています。気候変動は農業に甚大な被害をもたらします、カメムシの大発生も異常な高温の影響です。農作業はいのちを育成する創造活動であり、すべての人が関わられるようにしていきたいと語りました。

#### ③「農林水産省の生物多様性保全の取り組みについて」

農林水産省大臣官房みどりの食料システム戦略グループ  
地球環境対策室 古林 五月氏

農林水産省生物多様性戦略、みどりの食料システム戦略の概要と戦略に基づく取り組みの進捗状況、みどりの食料システム法の運用状況などが説明され、そのあと特に環境負荷低減のクロスコンプライアンス（みどりチェック）、生物多様性枠組の



30 by 30目標（2030年までに陸と海の少なくとも30%を保全又は保護する目標）を達成するためのOECD・自然共生サイト、農産物の環境負荷低減の「見える化」などについて説明がありました。

**④ 中間見直し「田んぼ2030プロジェクト」ラムネットJ共同代表 金井氏・呉地氏・館野氏**



田んぼ2030プロジェクトの水田目標中の重点課題を「生物多様性の保全回復にとって重要な農法・農地の在り方」「温暖化 / 気候変動対策と水田の生物多様性との関係」「農地を保全・保護区域に組み込むための方策」とし、これに向けた事業（例：ミニフォーラム、水田決議実施のための水田円卓準備会合の開催など）を説明しました。

呉地さんは、水田のメタン発生の主因は生の稲わらのすき込みで、推奨されている中干の延長は生きものを殺してしまう、もっと生きものの力を活用した総合的な管理を考えていくべきと加えました。

館野さんは、有機栽培は無施肥、緑肥などで慣行並みの収量はありますが、農家が生物多様性に配慮する取組は、直接生産に結びつかないことが多く、生物への配慮(のコスト)を生産物の販売だけではカバーできないことを国民が理解し、農業者の生活は国が支援すべきですと話しました。

最後に金井さんは、様々な情報の整理、実施できるシステムの構築が必要で、助成金がなくてもまわる仕組みをつかっていきたいと話しました。

**⑤ 「マイ宣言とその後—キックオフ集会から3年」コーディネーター 船橋 玲二氏**



2021年に小山市で開催した田んぼ2030キックオフ集会で宣言を行った農業、自治体、生協、市民団体、外食産業関係等の方々が、これまでの3年間の活動とこれからの目標について発表し、有機米・有機野菜100%の学校給食目標、高校生が中心の活動、有機農地拡大とコウノトリの増加などを紹介、2030年までの活動を約束しました。



～ 話題提供 ～

**第7回生物の多様性を育む農業国際会議(ICEBA)について**  
**コープ自然派しこく 川合 康平氏**

- ◆開催日: 2025年7月12日(土)、13日(日)
  - ◆会場: 小松島市サウンドハウスホール
- 生物多様性を基盤とした地域循環型の農業技術の確立とその国内及び国際的な普及の実現がICEBAの目標で、現在内容の検討を重ねています。来年7月にはぜひご参加下さい。

**MS&AD インシュアランスグループホールディングス グリーンアースプロジェクト**  
**「竹林の整備 — 印旛沼流域における台地と谷津での取組」に参加して 金井 裕 (ラムサール・ネットワーク日本)**

田んぼ2030プロジェクトに協賛いただくとともに、参加登録団体でもあるMS&ADグループの自然環境の保全・再生、地方創生をテーマとしたグリーンアースプロジェクトの印旛沼流域「美しい里山と健全な水循環プロジェクト」への活動参加のお誘いがあり参加させていただきました。場所は印旛沼北西、北総台地の谷戸「谷田武西」で、ここの生態系保全再生に取り組むNPO法人谷田武西の原っぱと森の会との協働作業でした。「谷田武西」の谷戸は、水田耕作が放棄されて後、雨水の浸透により湿地植生が維持され、斜面森林も含めて希少種も含めた多くの動植物が残る場所です。しかし、このままでは植生が単純化し、生きものの多様性も失われることから「谷田武西の

原っぱと森の会」では谷戸を一部掘削して池を作ったり、草刈の時期と回数を場所によって変えることによって植生に変化をつけています。

今回の竹林整備もこの一環で実施され、作業にMS&ADグループの職員・家族が参加しました。竹林は、かつてはタケノコの採取はもちろん、稲干しの支柱、籠材など生活材の供給に重要でした。ところが、現代では竹の利用がなくなり伐らないので、地下茎でどんどん広がり周りの森林にも入り込んで地上を覆いつくしていきます。竹林整備では竹を伐採して竹林の面積を減らし、地上に光を当てることにより生態系の機能を回復させます。伐採した竹は炭にして土壌改良などに利用することになっています。





竹の伐採

竹の伐採は、「谷田武西の原つばと森の会」のリーダーと西廣淳さん（国立環境研究所 気候変動適応センター副センター長）の指導により進められました。残った切株で怪我をしないように根元から切ること、危険の無いように竹の倒れる方向に注意すること、切った竹は炭焼きに備えて乾かすため枝打ちし、長さを切りそろえて積み上げておくことなどの説明を受けて、実際の作業に取り掛かります。小学生の参加者も果敢に大きな竹の伐採に取り組みました。初めはおぼつかなかった鋸のあつかいもすぐに慣れて、望む方向に倒せるようになります。午前中で作業



は終了し、野外の広場でおにぎりを食べ、集合写真を撮って解散です。

今回の竹林整備では、多くの手間がかかる山作業への応援になります。参加者にとっては、現場で起こっていることを自分の目で見ることで、竹に直接に触れて伐採することで土地とのつながりを実感できます。実際に作業することは、さまざまな点で重要なことです。

今回の作業参加については、MS&ADグループの唐澤篤子さん、谷戸の自然については「谷田武西の原つばと森の会」の松永由貴子さんに案内していただきました。御礼申し上げます。



竹の伐採に挑む参加者

MS&ADインシュアランスグループホールディングス グリーンアースプロジェクトについては下記のウェブサイトをご覧ください。   
[https://www.ms-ad-hd.com/ja/csr/green-earth\\_project.html](https://www.ms-ad-hd.com/ja/csr/green-earth_project.html)

## <水田部会からのお知らせ>

### ● 第9回ミニフォーラム：2025年2月開催予定。

テーマは「温暖化対策事業と生物多様性の劣化・喪失」（仮）、ラムサール条約世界湿地の日（2月2日）の記念イベントとして登録します。詳細が決まり次第ML/HP等でお知らせします。

### ● 田んぼだより第9号：3月中旬に発行予定。

久米島での水田再生の取り組み他、ミニフォーラムの報告等を掲載する予定です。



### 【編集後記】

イネカメムシの大発生、コメの不作、価格高騰など、生産者も消費者も苦しい状況での年の瀬となりました。温暖化の影響ははかり知れませんが、温暖化ガス削減対策事業は多方面からの検討が必要です。性急さは取り返しのつかない生物多様性の劣化に繋がりがねません。環境保全型の農業を実施する農家さんや現場に詳しい NGO/研究者などの提言を積極的に取り入れてより良い計画に！

※田んぼだよりへのご意見、活動情報等をラムサール・ネットワーク日本事務局までお寄せください。

また、田んぼだよりを PDF ファイルでのみ受け取りたいという方は、その旨事務局までお知らせくださるようお願いいたします。



田んぼ 2030 プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。  
 このニュースレターは、2024 年度 地球環境基金の助成を受けて作成しました。

